



Title	「関係」の呼称の言語学一日中対照研究からのアプローチ
Author(s)	薛, 鳴
Citation	大阪大学, 2025, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/101586
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed 大阪大学の博士論文について

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏名(薛鳴)	
論文題名	「関係」の呼称の言語学——日中対照研究からのアプローチ
論文内容の要旨	
<p>本論文は、「関係」をキーワードに、その最たるものとも言える「親族名称」から展開していく日中対照研究である。題名にある「呼称」という語は、名詞として「呼び名、名まえ、称呼」となっており（『広辞苑』第6版）、本来は「親族名称」の上位語であるが、ここでは親族名称に特化したものを呼称ととらえ研究対象としている。</p> <p>親族名称の体系からその社会の家族ないし血縁・姻縁関係のあり方を探る手法は、19世紀末から20世紀前半にかけて、主にアメリカの人類学者によって用いられた。しかし、それは系譜上の関係を示す名称であり、その名称についての記述的研究が主流であった。後に親族名称の呼称（呼びかけや言及）としての使い方の考察も言語学者によって行われるようになった。日本では親族名称について、鈴木孝夫氏の一連の研究がよく知られる。一方、中国語の親族名称（「亲属称謂」）は世界の言語の中でも複雑な体系をしていると言える。中国では親族名称の代表的な研究は、『汉语亲属称謂研究』（胡士雲2007）を挙げることができる。中国語の親族名称のシステムを通時的且つ共時的な視点から網羅した親族名称についての記述研究であると言える。</p> <p>言語によって基本語彙が異なりを見せることは当然である。それは、ある言語の母語話者が何を気にするまたは気にしないかを物語っている。人類学的に観察と考察の対象とされてきた親族名称には、その社会の最も原始的ともいえる「関係」のあり方が書き込まれていると考えられる。中国語の場合、長い間続いた父系社会と脈々と受け継がれてきた儒教の思想が親族名称を複雑なものにした。日本語と中国語を対照してみたとき、ある「関係」を表す名称は一方の言語にあって、もう一方の言語にはないというような事態が生じる。一方、両言語とも、同じような意味の名称があるにも関わらず、異なった使い方をするという現象も見られる。それが両言語の母語話者の言語行動に反映され、コミュニケーションに障害をきたすこともあり、異文化コミュニケーションにおいては、むしろ落とし穴にもなるような問題を孕んでいると言える。</p> <p>敬語が日本語ほど発達していない中国語社会では、他人への呼称は対人関係の指標の一つとなり、その使用は敬意を表す重要な手段となる。親族名称は関係そのものが書き込まれているだけに、その使い方は対人関係の調節弁になっているとも言える。鈴木（1973）を中国語に照らし合わせてみたとき、中国語は自己より年下への親族名称の使用といった、「分割線」にそぐわない現象も観察される。また、親族外への使用は単なる「虚構」に留まらず、中国語社会の人間関係のあり方を考慮に入れると、「拡張的」と言う方がより中国語社会に即していると考える。本論文では先行研究を踏まえ、中国語における親族名称使用の様相を考察すると同時に、現代日本語社会に観察される親族名称の使い方にも注目して、鈴木（1973）を再考し、より実態に即した考え方を示そうと試みた。</p> <p>論文は7章からなっている。第1章～第5章の親族名称についての考察に続き、第6章では、日中母語話者の言語行動について、「人間関係」を切り口に分析し、第7章では中国語の複数形接辞“們”について、名詞の「関係性」からその振舞いを日本語の「たち」と対照し考察した。</p> <p>以下各章の内容を簡単に記す。</p> <p>第1章「言語形式としての親族名称—「関係」の表示」では、言語形式としての親族名称を概観する。親族名称には、系譜上の関係を示す「名称」と、当人を呼びかけるときに使う「呼称」が含まれるが、論を進めるうえ、「言語形式」と「言語使用」という用語を用いる。前者は語彙項目としての意味論的範疇であり、後者は使い方としての語用論的範疇を見て、本章のタイトルの「言語形式」は、その意味合いで用いる。人類学者による古典的な「親族名称の類別的体系」（クローバー1909）で提示された意味項目に中国語の親族名称を照らし合わせてみると、中国語親族名称の緻密さが見えてくる。日本語との有意な対照として数組の親族名称を取り上げ、日中両言語それぞれの体系的特徴を見出し、第2章以降の「言語使用」の問題を考察する際の深層構造ともいえる文化的要素を提示する。</p>	

第2章「家族・親族内における親族名称の言語使用」では、「呼びかけ」としての呼称、「言及」としての名称及び呼称について、日中両言語に見られる使い方を考察する。具体的には対称語としての呼称、自称語や他称語としての言及に分けて考察を行った。対称語としての呼称について、中国で近年見られる年下の者への呼びかけに親族名称が使われる例を取り上げ、鈴木（1973）の親族名称使用の「分割線」にそぐわないような現象を中心に分析を加えた。自称語としての言及は、我が子に自己のことを言及する（baby talkではない場合）とき、親族名称（父母称詞）か、人称詞か、それとも両方の併用か、アンケート調査とホームドラマのテキストを通して調べ、日中母語話者それぞれの特徴や両言語母語話者間に見られる違いを明らかにする。一方、他称語としての言及については、本章でも記述するが、さらに次章で検証することにした。

第3章「テクノニミーについての日中対照」では、まず中国語のテクノニミーについて考察する。中国語の“親從子称”（子に従って呼称する。子に従った呼称）から“从儿称謂”（“從兒称謂”意味同上）へ、前者と後者との間に約半世紀の隔たりがあった。前者はH. Y. Feng（1936）がアメリカの人類学誌に発表した研究を芮逸夫（1945）が論及する際に当たった中国語であり、後者は中国語の分野でよく知られている伍鉄平（1985）による用語である。中国語のテクノニミーを辿っていくなか、定型した語彙レベルのものと、家族間の呼称の使い方という、二つの視点から考察する必要があると考え、前者と後者をそれぞれ考察することにした。なお、後者はアンケートなどによる実態調査の結果とその分析を中心に考察を行った。

以上、第1章～第3章は、親族名称のカテゴリー及び家族・親族内における使い方の考察であるが、以下、第4章と第5章は日本語・中国語別に親族名称の親族外への使い方についての考察である。

第4章「家族・親族外の親族名称の言語使用—日本語の場合」では、鈴木（1973）の「虚構的用法」を整理し再考を試みた。そのために、使用者を「年少者の場合」と「成人の場合」に分けて考察する必要があると考えた。年少者の場合、親族名称の選択が自己から見た関係性によるが、成人の場合は、自己から見た関係性によらない。自己の父母ではない人を「お父さん」や「お母さん」と呼ぶのがその端的な例である。本章で、使用者が成人の場合を中心に、「父母称詞」を始め、「オジ・オバ称詞」「兄姉称詞」をそれぞれメディア放送における対談やコープスから得た用例を分析した結果、関係性によらない、一種の職業化した、ないし年齢的特徴を具現化した用法になっている傾向にあることが分かった。その用法を「社会的呼称化した用法」とし、年少者のそれとは異なることを指摘した。

第5章「家族・親族の親族名称の言語使用—中国語の場合」では、話し相手を「既知の人」と「未知の人」に分けて、どう呼称するかについて考察した薛（2000）から、両方とも、中国語母語話者の方が親族名称の使用率が高いという結果を得ている。もっとも、職場などでは役職が優先されるが、それでも同世代間では兄姉称詞の使用が目立つことが現在も観察される。未知の人に対して、かつての“同志”が使われなくなり、その埋め合わせに親族名称が以前にも増して多用されるようになり、いわゆる「呼称の初期化」現象が見られる。一方、それでも、父母称詞が見られないのは、中国語話者は自己から見た関係性から親族名称を選択するためであると言える。社会的呼称として使用されているとはいえ、日本語母語話者のそれとは異なった様相を見せている。中国人の人間関係が血縁関係から“外推”していくように広げていくとする社会学者の理論を参考に、中国語社会の親族名称の親族外への使用を「拡張的用法」という用語を提起した。なお、前出した筆者の研究から20年余経過しているが、その後の状況を調査を通して「再び「親族名称」」に示し考察を行った。

第6章「関係にまつわる言語行動の諸相」では、人間関係が如何に言語行動に影響するかを考えるにあたって、広く言語化以前の問題も含め言語行動を考察することにしている。中国人社会学者の滯日中のエピソードから、その違和感が、いずれも日中母語話者の言語行動の違いに由来し、“面子”と人間関係のとらえ方も関わっていると考える。そこで、社会学の理論、日本人論ないし中国人論といった文化論的な論考も援用し、日中それぞれの人間関係のあり方に、（日本の）「世間」と（中国の）“人際”という枠組みを提示し、さらに「世間」から「空気」、“人際”から“熟人”と、日本と中国それぞれの特徴づけになるキーワードを提起し考察した。その上、「関係の構築」、「関係の維持」、「関係の表示」について日本語社会と中国語社会の対照を示して分析を行う。

第7章「“们”にまつわる「関係性」」では、中国語の複数形接辞“们”と日本語の「たち」との対照をベースに、“们”的名詞との共起関係とその振舞いを考察する。人称詞から一般のヒト名詞へと分析し、「関係性」の有無により、ヒト名詞をカテゴリー化することで、複数に「代表者その他」と「同類の集合」という二通りの意味があることを指摘する。日中両言語のヒト名詞における複数形接辞、ないしその対極にある個を表す“一个”（一人の）との共起に見られる違いから、中国語の名詞は属性的指向がより強いということを浮き彫りにした。

本論文で展開される各章は、「関係」という切り口から見出した研究である。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (薛 鳴)	
	(職) 氏 名
論文審査担当者	主査 大阪大学 教授 渋谷 勝己
	副査 大阪大学 教授 高木 千恵
	副査 大阪大学 准教授 眞野 美穂
論文審査の結果の要旨	
以下、本文別紙	

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：「関係」の呼称の言語学—日中対照研究からのアプローチ—

学位申請者 薛 鳴

論文審査担当者

主査	大阪大学教授	渋谷勝己
副査	大阪大学教授	高木千恵
副査	大阪大学准教授	眞野美穂

【論文内容の要旨】

本論文は、日本語と中国語の、それぞれの人間関係の捉え方を映し出す親族名称を主たる対象として、その体系と、呼称、言及称としての運用のあり方を分析したものである。家族・親族内での親族名称の使い方を考察した第1章から第3章と、家族・親族外への使い方について考察した第4章・第5章、日中両語の言語行動について「人間関係」を切り口に広く分析した第6章、中国語の複数形接尾辞“们”について「関係性」という視点から日本語の「たち」と対照して考察した第7章の、7章より構成される。本文A5判202ページの分量である。

第1章「言語形式としての親族名称—「関係」の表示—」では、日本語と中国語の親族名称を表す言語形式とその形式が指示する人物を、基本となる8つの弁別素性（世代の別、直系・傍系の別、世代内での相対年齢など）等をもとに体系的に整理し、以下で展開する親族名称の運用面での研究の基礎としている。

第2章「家族・親族内における親族名称の言語使用」では、呼称について中国で年下の者への呼びかけに親族名称が使われる例を取り上げ、鈴木孝夫が指摘した日本語の「分割線」的使用とは異なる運用のあり方が観察されることを述べている。言及称についても、自分の年少の子どもに対して自分や家族・親族内の他者に言及するとき、日本語では家庭の最年少者の視点によってたとえば「お父さん」と言うのに対し、中国語では「你爸（あなた（話し手視点）のお父さん（話し相手視点））」のように話し手と聞き手の視点が分離することを明らかにしている。

第3章「テクノニミーについての日中対照」では、中国語の配偶者および祖父母への呼称と言及称をアンケートによって調査し、家族間での呼称、言及称とともに子どもの視点をとるテクノニミーは限定的であるものの、父母よりも祖父母、自己の父母よりも配偶者の父母の呼称により多く使用されることを見出している。また日本のアニメ映画の中国語訳を分析し、日本語から直訳された総合型のテクノニミーのほか、「三人称代名詞+親族名称」の倒置型である「親族名称+三人称代名詞」のような分析型のテクノニミーが使用されていることを指摘した。

第4章「家族・親族外の親族名称の言語使用—日本語の場合—」では、日本語で成人の話し手が家族・親族外の人物に親族名称を使用する事例について、鈴木孝夫の言う「虚構的用法」を批判的に検討しつつコーパス等の用例を分析し、街頭インタビューなどで自身の父母でない人に「お父さん」や「お母さん」と呼びかけ、言及するような、家庭内役割や年齢的特徴から抽出した特徴を一般化した「社会的呼称化」用法があることなどを述べている。

第5章「家族・親族外の親族名称の言語使用—中国語の場合—」では、中国語で家族・親族外の人物について親

族名称を使用する場合について、大学生へのアンケート調査等をもとに分析している。道で呼びかける場合などに相手との距離を縮める方策として親族名称を使用すること、この呼称は待遇表現として働き、相手より一つ上の世代の親族名称を使用することなどを指摘し、社会学者の“外推”という概念を参照して、中国語での親族外の人物への親族名称の使用を、擬似的に親族関係を読み込む「拡張的用法」と呼ぶことを提案している。

第6章「『関係』にまつわる言語行動の諸相」は、言語行動の背景にある日中の人間関係のとらえ方を、他分野の先行研究も踏まえて広く議論したところである。日本では「世間」や「空気」が社会的ルールとして言語行動を制約するのに対して中国では相手の“面子”を優先させること、日本語ではウチ・ソト・ヨソの相手への言語行動様式が明確に区別されるのに対して中国語での区別は弾力に富んでおり、相手を親族名称で呼びかけることは相手を“熟人（よく知っている人）”の領域に引き込み、親しさを示す方策となること、などを指摘している。

第7章「“们”にまつわる『関係性』」では、中国語の複数形接尾辞“们”と日本語の「たち」を「関係性」という観点から分析している。中国語のヒト名詞を「関係性を示すか否か」「唯一性を持つか否か」といった点から分類し、それらの名詞に“们”が後接するか否か、後接した場合「代表者その他」と「同類の集合」のいずれを表すか等を整理するとともに日本語の「たち」と比較し、「たち」は「代表者その他」と「同類の集合」の両者を担うなど使用制約が緩いが、中国語の“们”的用法は「関係性の有無」に制約される側面があること等を指摘している。

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、日本語と中国語の呼称に関わる諸形式のうち親族名称を主な対象として、その体系や運用のあり方を、人間関係の把握の仕方という観点から詳細に記述し、分析したものである。分析に用いたデータはアンケート調査の結果、メディアでの対談、（対訳）小説、観察、中国語学習者の誤用例など多岐に渡り、文化人類学や社会学など他の分野の研究成果も参照して重層的な分析と議論を行っている。

親族名称の体系は20世紀前半の文化人類学において盛んに研究され、それぞれの共同体での血縁関係・姻戚関係の捉え方が解明されてきた。日本語についても、鈴木孝夫によって、「自己よりも年上の者には親族名称を使用するが、年下のものには使用しない」といった「分割線」があること、また親族以外にも親族名称を使用する「虚構的用法」があることなどの運用面の特徴が指摘されている。本論文は、日中両言語の親族名称について、多様な資料をより広い視野から分析することによって、中国語では敬語が日本語ほどには発達しておらず、他人をどう呼ぶかが敬意を表す重要な手段になること、日本語では人称代名詞の使用が制限されている中で人を親族名称で呼ぶのに対して中国語では人称代名詞の使用にとくに制限がないにもかかわらず親族名称で人を呼ぶこと、親族名称の運用には日本と中国での人間関係の捉え方の違いが関わり、日本語では自己との関係を示さない「社会的呼称化」、中国語では相手を親族名称で呼びかけることによって相手を“熟人（よく知っている人）”に引き込むといった運用法の違いとしても現れること、など、新たな事象の指摘や解釈が数多く盛り込まれている。

ただし、本論文に問題点がないわけではない。本論文には、キーワードである「呼称」や「関係」という用語が異なった意味で使用されている箇所があり、一部の理解を妨げている。また、取り上げられた親族名称が網羅的でない、あげられた用例のグロスを欠く、自身のものも含む先行研究の内容の記載が不足しており本論文の自己完結性を損ねているところがあるといった問題もある。とくに第1章～第5章と第6章・第7章は「関係」というキーワードがやや異なった意味で用いられており、両者を総括する章が望まれるところであった。

以上のように本論文にはいくつかの問題点が残されたが、従来の研究の成果や問題点を整理しつつ、調査や観察によって新たな知見や独自の解釈を数多く提示し、この分野のさらなる発展のためのステップを築いた本論文の本質的な価値を損なうものではない。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。